本学創立四十周年記念の賀詩（注１）

本学五十周年記念館四階の大会議室に大きな額が掲げてある（注２）。これは創立四十周年の昭和三十八年十月に高田真治博士が作った賀詩である。高田博士は元東京帝国大学教授で中国哲学が専門であるが、陶軒と号して漢詩にも長じた。本学には昭和三十一年四月に中国文学科教授に就任し、四十一年三月に退任した。

この賀詩は五言（ごごん　古詩で四十韻、漢詩は偶数句に押韻するから八十句四〇〇字の長編である。途中、韻を三回変えており、それを換韻といい、同一の韻を用いている部分を解といい、段落に相当する。その個所に“亅”印を付した。古詩であるから典故のある難しい語句が用いられている。文字も高田博士の自筆である。

詩は大東文化の創立の由来から説き起こし、学院が幾多の人材を世に送り出したことを述べ、戦時中の学徒の苦難と校舎の戦災を述べ、西台に移って校舎を新築し、学科を増設してますます発展することで結ぶ。

ただ途中に高田博士の思い違いの個所がある。それは九段校舎の時代は漢学だけの単一学科であったが、東亜政経科などを設けて三部制となったので池袋に移った。戦災で校舎が焼失したために、一時青砥の仮校舎に移り、池袋に仮校舎を造り、それから西台（今の高島平　に移ったのであるが、詩では九段から青砥に転じ、それから池袋に移ったと詠じているので明らかにしておく。

大東文化学園創立四十周年賀詩四十韻（注３）

天地有否泰	天地に否泰（ひたい）有り	天地の間の万物は、互いに通じたり、あるいは塞がったりする
人世随汚隆	人世は汚隆（おりゅう）に随う	そこで人の世もそれに随って、盛んになったり衰えたりする
明治復古際	明治復古の際	明治が復古をめざしたとき
維新大業崇	維新の大業崇（たか）し	維新の大業は崇高であった

群俊奉聖主	群俊は聖主を奉じ	俊英たちが天皇を奉り
尽瘁竭孝忠	尽瘁（じんすい）して孝忠を竭（つく）す	力のかぎり孝と忠を尽くした
経世尊儒術	世を経するに儒術を尊び	世を正しく治める上で儒学を尊び
志士敦誠衷	志士は誠衷を敦（あつ）くす	志しある者はまごころを重んじた
東西文運会	東西文運の会	東西の文化・学問が盛んになる気運がおこったとき
済美還折中	美を済（な）し還（また）折中す	その良いところをのばしたり、あるいは折中した
進取適偏重	進取は適（たまたま）偏重し	ところが、勇んで行ったため、一方だけを重んじ
欧化壊醇風	欧化は醇風を壊（やぶ）る	欧化は儒学の純風をうち壊した
弁髦洙泗道	洙泗（しゅし）の道を弁髦（べんぼう）にし	孔子の教えを無用の物とし
美俗委尨茸	美俗は尨茸（ぼうじょう）に委（ゆだ）ぬ	良い習わしは乱れるままにした
国士慨然起	国士慨然として起ち	ここに、憂国の士が憤って立ち上がり
結盟覚昏瞢	盟を結んで昏瞢（こんぼう）を覚（さと）す	盟約を結んで道理を明らかにし
建議謀国会	建議して国会に謀り	「漢学振興に関する建議案」を国会に提出し
学園剏大東	学園大東を剏（はじ）む	大東文化学院を創建した
国漢為扶翼	国漢を扶翼と為し	国学と漢学を助けとし、
皇道期醇融	皇道醇融を期す	皇道が純一に考究されんことを期したのである
招聘邦碩学	邦の碩学を招聘し	かくして、本邦の碩学鴻儒をお迎えし
訓導飭厥躬	訓導して厥躬（そのみ）を飭（ととの）う	学生を教え導いてその身をつつしみ正さしめ
彬々毓多士	彬々（ひんぴん）として多士を毓（いく）し	文質彬々たる多くの人士を育み
成材一方雄」	材を成す一方の雄	先導者たる人材を輩出したのであった
陽九遭国蹶	陽九国の蹶（つまづ）くに遭い	ところが、命運変わって多くの災厄が集まると、国家はつまずき
天歩頻鼿卼	天歩頻（しきり）に鼿卼（けつごつ）たり	天の運行はしきりに動揺し、世の中は不安定になった
学徒執銃征	学徒銃を執りて征き	学徒は銃を担いで出征し
奉勅耐苦節	勅を奉じて苦節に耐う	勅命をいただいて苦節に耐えた
北荒也南溟	北荒に也（また）南溟に	北方の荒野や南方の暗い海で
殉難曬戦骨	難に殉じて戦骨を曬（さら）す	戦で殉死して遺骨を晒し
猶有未招魂	猶（なお）未だ招かざるの魂有り	今なお呼び寄せていない死者の御魂があり
血涙転忽忽	血涙転忽忽（うたたこつこつ）たり	血の涙がとめどなく流れるのを禁じ得ない
国殤豈徒労	国殤豈（こくしょうあに）徒労ならんや	若くして死んだ無名の戦士は、はたして徒労だったのだろうか、決してそんなことはない
東亜感義烈	東亜義烈に感ず	東亜の正義あふれる戦士に0 人はみな深い感動をおぼえるはずである
諸邦相独立	諸邦相（あい）独立し	諸国はそれぞれ独立し
民族自団結	民族自ら団結す	民族はみずから団結した
糸綸哀痛切	糸綸（しりん）哀痛切に	天皇の詔は哀痛の念極まりなく
奉戴九腸裂	奉戴して九腸裂く	謹んで承り、腸が断ち切れんばかりである
嘗胆誓復興	胆を嘗（な）めて復興を誓い	苦難を忘れず復興を誓い
億兆五情熱」	億兆五情熱す	億兆の日本国民の五情は熱く燃えあがった
学園創建始	学園創建の始め	大東文化学院の最初の校舎は
隣接靖国宮	靖国の宮（みや）に隣接す	靖国神社に隣接し
転址青砥側	址（あと）を転ず青砥（あおと）の側ら	後に青砥に転居し
更移池袋墉	更に移る池袋の墉（しろ）	さらに池袋へと移った

黌舎被戦災	黌舎《こうしゃ》戦災を被り	校舎は戦災を被り
空委祝融紅	空しく祝融の紅に委《ゆだ》ぬ	空しく紅蓮の炎に焼かれてしまった
恢弘豈無術	恢弘するに豈《あに》術無からんや	復興発展させる方策が無い、などということがあろうか
衆議賛協同	衆議賛して協同す	多くの人々が意見を出し、賛同し協力し
城北西台野	城北西台の野	城北は西台（高島平）の土地を
ト兆吉祥従	ト兆《ぼくちょう》吉祥従う	占ってみたところ吉祥であった
原田蒼莽裡	原田蒼莽《げんでんそうもう》の裡《うち》	原野の田地には草木が青々と生い茂っていたが
定礎茲起工	礎を定めて茲《ここ》に工を起す	ここに基礎を定めて竣工した
宏壮新建築	宏壮たり新建築	広く立派な新建築は
巍然闢蒙叢	巍然《ぎぜん》として蒙叢《もうそう》を闢《ひら》く	乱れる草むらを開拓して山のようにどっしりしている
四層高閣聳	四層高閣聳《そび》え	四階建ての高層がそびえ立ち
跂翼張偉容	跂翼《きよく》偉容を張る	大きく翼を広げたようで威厳がある
皇漢二学外	皇漢二学の外	日本文学科と中国文学科のほかに
増置設専攻	増置して専攻を設く	専攻を増設した
経済与経営	経済と経営と	経済と経営は
新進聚駿駿	新進は駿駿《しゅんそう》を聚《あつ》む	新進の秀才を集めて開設された
学徒幾多千	学徒は幾多千	学生数は数千人
男女共学功	男女学功を共にす	男女共学である
孜々肄其業	孜々《しし》としてその業を肄《なら》い	勤勉に学業を習得し
進徳百科通	徳に進み百科通ず	徳目を身につけ百科に精通すること
知新而温故	新を知りて故を温《たず》ね	温故知新によって
乾々継往蹤	乾々として往蹤《おうしょう》を継ぐ	前人の残した足跡を怠らずに受け継ぐこと（が教育の目標である）
青春惜居諸	青春は居諸《きょしょ》を惜しむ	青春は瞬く間に過ぎるゆえに歳月を惜しみ
当期修治豊	当に修治の豊かなるを期すべし	修治することの豊かならんことをめざしてほしい
民維邦之本	民は維《これ》邦の本	民は国の根本であり
信即徳之宗	信は即ち徳の宗	信は徳の本源である
日本天子国	日本は天子の国	日本は天子の国
皇祚自無窮	皇祚《こうそ》自《おのずか》ら無窮なり	皇位は永遠である
扶桑伝正気	扶桑正気を伝え	扶桑の国、日本は天地の正しい気を伝え
青青幾寒松	青々とし幾寒松	寒さにも枯れない青々とした松の木のような節義を重んじている
後進須奮発	後進須く奮発すべし	学生たちよ、気力を奮いたたせよう
時秋霽碧空	時秋にして碧空霽《は》る	時は今や秋、空が青々と晴れわたっている
明窓矯首望	明窓首を矯《あげ》て望めば	頭を上げて明るい窓の外を見れば
白雪仰芙蓉	白雪芙蓉を仰ぐ	白い雪の積もる富士山が仰がれよう
終古東方美	終古東方の美	富士は永遠に変わることのない東方の美
袖州霊秀鍾	神州霊秀鍾まる	神の国日本の精霊が集まる山である

　昭和癸卯十月卅日

　陶軒　高田　眞

〈語釈〉

○否泰＝万物が交わり通じることと塞がること。○人世＝人の世。世の中。○汚隆＝盛衰に同じ。○洙泗道＝孔子の教え。○弁髦＝無用のもののたとえ。○尨茸＝乱れたさま。○昏瞢＝暗い。知議が暗く道理に明らかでない。○国漢

云々＝建学の精神が皇道に醇化した儒学を研究すること。○毓＝育に同じ。○陽九＝陽厄五、陰厄四の九つの厄。災難の意。○䑺陒＝動揺して不安定のさま。○北荒＝北方の荒野。○南溟＝南の暗い海。○忽忽＝涙が流れるさま。○国殤＝若くして死んだ無名の戦士。○糸綸＝天子のみことのり。○嘗胆＝苦いきもをなめて苦しみを忘れないこと。○墉＝小さい城の意。○祝融＝火をつかさどる神。火災をいう。○西台＝当初は西台町であったが町名変更で高島平となる。○卜兆＝占い。○原田＝高原・原野の田地。○蒼莽＝草木が青々と茂るようす。○巍然＝山のように高いようす。○蒙叢＝荒れた草むら。○跂翼＝大きく翼をひろげたようす。○皇漢＝日本文学科と中国文学科。○駿騣＝駿馬のこと。優秀な人材のたとえ。○知新温故＝温故知新に同じ。古いことを研究して、その中から新しい見解や知識を得ること。○乾々＝怠らずにつとめる。○往蹤＝前人の残した足跡。○居諸＝歳月の意。○修治＝修めつくろう。○扶桑＝日本の異名。○寒松＝寧さに負けない松の木。○芙蓉＝蓮の花。富士山頂に八つの峰があるのが蓮の花びらの八弁と同じところから富士山を芙蓉峰という。○終古＝永久に。○癸卯＝みずのとう。昭和三十八年（1963）に当たる。

〈注〉

1　本文は、原田種成先生（当時中国文学科講師）が、1990年5月15日発行『大東文化新聞』第416号にお書きになった文章を転載させていただいた。掲載時にすでに原詩の旧漢字は、新漢字に訂正されている。

2　この大きな額は、二号館二階の常務理事室（現在副学長室として使用）の壁面にかけられている。
サイズは次の通り。作品：縦60cm×横260cm　　額：縦85cm×横300cm

3　原詩・訓読・語釈の加筆修正ならびに現代語訳は、鷲野正明氏（中国文学科卒）ほか数名のOBのご教示を得た。ここに記して感謝申し上げる。

2019年3月18日　文責・河内利治